

# ADHD 傾向をもつ大学生に関する心理学的研究

—女性の ADHD 傾向と対人恐怖心性、および孤独感に注目して—

長 村 和 美

Psychological study of female college students with tendency of ADHD.  
The relationship between anthropophobia mentality and loneliness in  
female college students with tendency of ADHD.

Kazumi Nagamura

## I、問題と目的

ADHD とは不注意・多動性・衝動性などの行動特徴をもつ障がいである。不注意とは、「課題の持続が低く、一つの活動に集中できず、転導性が高く、気が散りやすい」等の行動特徴をさす。また、多動・衝動性とは「じっとしていなければならない状況で過度に落ち着かない状態。衝動性も高く、情緒的にも不安定で欲求不満耐性が低い」等の行動特徴をさす。DSM-IV (1994) では、以上のような症状によって多動性-衝動性の行動特徴を持つ多動性-衝動性優勢型、不注意の行動特徴をもつ不注意優勢型、多動性-衝動性・不注意のどちらの行動特徴も持ち合わせている混合型の3つに分類されている。

遠矢 (2002) は通院歴がなく、ADHD の診断を受けたことがない、一見通常の社会的生活を送っている青年期以降の人々の中には、顕著な不注意、多動性、衝動性に関する困難を抱えているものが存在する可能性は極めて高いと述べている。また、Kathleen Nadeau (2003) は診断基準内容を見てみると成人にはそぐわない記述が目立つと述べている。そのため、通常の社会生活を送っている成人の中にも診断基準を満たすほどではなくとも ADHD の行動特徴を持つ人々がいると考えられる。彼らは一見通常の社会的生活を送っているように見えるが、不注意や多動性・衝動性などの行動特徴のために生活の中で様々な失敗を繰り返していることが考えられ、それによって様々な心理的苦痛を受けていると考えられる。

しかし、現在このような人々を取り上げた研究は殆どない。そのため本研究では以上のように「ADHD と診断は受けていないまでも、日常の生活の中で、不注意・多動性・衝動性などの行動特徴によって生活の中で困難を感じている状態」を ADHD 傾向と定義し、これら ADHD 傾向をもつ人々の心理的苦痛について注目していきたい。

では、彼らは実生活の中のどのような場面において心理的苦痛を抱えやすいであろうか。遠矢 (2002) は一見、

社会に適応しているように見える青年の中には、不注意傾向を認識するものがある。彼らは対人コミュニケーションの中で困難を抱え、対人関係上の問題を強く認識していると指摘している。また、岩崎 (2006) は「アダルト ADHD 患者は対人関係の困難さを訴えて初診にくることが多い」と述べている。そのため、ADHD 傾向をもつ人々は対人コミュニケーションの中で失敗することが多く、他者とのコミュニケーションをとっていく中で、傷つき体験を繰り返している可能性があり、対人恐怖 (対人場面において不当に強い不安や緊張を生じて、人から嫌がられたり、変に思われたりすることを恐れ、対人関係を避けようとする (清水ら 2005)) を抱えていることが考えられる。

また、野口ら (2006) は ADHD 児は孤独感を感じやすいということを指摘している。そのため、ADHD 傾向をもつ人々は孤独感を抱いているのではないだろうか。

さらに、岡野 (2002) は女兒の場合、小児期には ADHD と理解されにくいいため、困難と困惑を抱えて成長していくこととなり、成長後、対人関係や社会参加のあり方に大きな影を投げかけることになることと述べている。Kathleen Nadeau ら (2003) は ADHD の女性は「人と付き合い方を避けてしまう」こと等があると述べている。以上のことから女性の中には ADHD 傾向をもち、対人恐怖心性を抱いている人々は多いのではないだろうか。

本研究では以上のことより、ADHD 傾向をもつ女性と対人恐怖心性との関係性、および孤独感との関係性を明らかにすることを目的とする。そのためにも、予備調査において、大学生の ADHD 傾向を測定する尺度を作成し、本調査においては女子大学生の ADHD 傾向と対人恐怖心性の関連性、および孤独感との関連性を明らかにしていく。

## II、予備調査

1、調査時期 2006年10月～11月末

## 2、調査対象者 大学生、大学院生合計61名

(男性29名、女性32名、平均年齢24.28 標準偏差3.28)

## 3、調査方法

A県内に国立大学2校、私立大学1校の大学4年生、大学院生、合計63名を対象に、空いた時間も個別で行うように指示した。有効回答率は96.8%、男性29名、女性32名、合計61名であった。

## 4、調査内容

ADHD傾向を測定する尺度を作成するために、①DSM-IV診断基準、②Women's AD/HD Self-Assessment Symptom Inventory (SASI)、③ADHsf(不注意、多動性、衝動性の症状について、診断を受けているか否かにかかわらず、こうした傾向を強く認識する人々)、心理・社会的不適応感、学習の困難感に関連する尺度(遠矢 2002)、④ADHD成人版自己チェックリスト(武市、脇口 2004)を参考に質問紙を作成した。項目内容は臨床心理学を専攻する大学院生4名、臨床心理学専門家1名で各項目の表現・内容について修正を加え、36項目を抽出した。

各項目については、5件法(1点:全くあてはまらない~5点:非常にあてはまる)で回答を求めた。

## 5、結果

項目の検討:各項目の回答に極端な偏りのある項目がないことを確認した。ADHD診断基準より、2因子で主因子法・バリマックス回転で因子分析を行なった。その結果、因子負荷量が.35に満たない項目が6項目あったため、それらを削除し、再度30項目で同様に因子分析を行なった。

第一因子は“24、じっとしてられない、何かに駆り立てられるように活動してしまう(.75)”“32、何かしたくて我慢できないようなことがある(.73)”“9、じっとしていなければならぬ状況において、落ち着かない感じがする(.66)”“17、あれこれと興味が移り変わることがある(.64)”“6、私はよく動き回るので、周りの人たちは落ち着かない気分になってしまう(.64)”“14、一番になりたがったり、先にやりたがるがある(.64)”“36、文章を読んでいても、人の話を聞いていても興味がないとついふらふら別のことを考えてしまう(.62)”“33、思ったことをなんでも口にしてしまうので、時には後で「しまった」と思うことがある(.62)”“18、他の人がしていること(話や活動など)をささげたり、邪魔したりする(.62)”“4、質問が終わらないうちに、出し抜けに答えてしまうことがある(.61)”“3、直接話しかけられているときに、聞いていないように見える(.56)”“12、他の同性に比べるとエネルギーがあふれている方だ(.54)”“13、手足をそわそわ動かしたり、椅子の上でもじもじしたりすることがある(.49)”“29、深く考えないで物事をぱっと決断することがある(.49)”“27、急に思いついて買い物をする(.46)”“22、秘密を守れないことがある(.42)”“16、静かに読書をするのが難しい(.41)”“35、指示や命令を取り違え

ることがある(.41)”“30、講義や集会、勉強中など座っていることを要求される場面で席を離れることがある(.38)”“34、どなってしまって、話し合うことで解決できないことがある(.36)”など、多動性-衝動性に関する因子であると考えられる(寄与率=22.37%  $\alpha$  =.91)。

第二因子は“5、指示に従わず、またやるべき勉強や仕事を最後までやりとげられない(.71)”“20、日々の活動を忘れてしまう(.67)”“28、勉強や仕事を途中で投げ出すことがある(.66)”“2、勉強や仕事、遊びなどを集中をし続けることが難しい(.64)”“25、物をどこに置いたか忘れてしまったり、どこに置いていたかわからなくなってしまうことがある(.63)”“10、気が散りやすい(.58)”“8、課題や活動に必要なものをなくすことがある(.56)”“31、勉強や仕事などを順序だてて行なうことが難しい(.52)”“19、精神的な努力を続けなければ勉強や仕事を最後までやりとげることができない(.48)”“26、勉強や仕事で細かいところまで注意を払わなかったり、不注意な間違いをする(.44)など、不注意に関する因子であると考えられる。(寄与率=15.17%  $\alpha$  =.85)。以上の2因子の累積寄与率は36%であった。(Table 1)

## Ⅲ、本研究方法

### 1、調査対象者

A県A大学の大学生1年生から4年生(合計222名)を対象とした。被験者全体の平均年齢は20.5歳(SD=2.79)であった。有効回答率は94.6%であった。

### 2、調査時期・形式

「普段の生活で感じる不安についての調査」という名目で、2006年12月に2回に分けて通常の講義時間の一部を使用し集団で一斉に実施した。解答所要時間は15~20分であった。

### 3、調査内容

質問項目は以下のとおりである

- (1)ADHD傾向測定尺度:予備調査によって得られた、多動-衝動性に関する項目(20項目)、不注意に関する項目(10項目)の合計30項目を使用した。30項目はそれぞれ5件法(1点:まったくあてはまらない~5点:非常にあてはまる)で評定してもらった。
- (2)対人恐怖心性尺度:堀井・小川(1997)が作成した、『自分や他人が気になる』悩みに関する5項目、『集団に溶け込めない』悩みに関する5項目、『社会的場面に当惑する』悩みに関する5項目、『目が気になる』悩みに関する5項目、『自分が統制できない』悩みに関する5項目、『生きることに疲れている』悩みに関する5項目の6つの下位尺度に分かれる30項目を使用した。30項目はそれぞれ7件法(1点:全然あてはまらない~7点:非常にあてはまる)で評定した。

Table 1

		因子		
		1	2	共通性
24	じっとしてられない、何かに駆り立てられるように活動してしまう	.748	-.026	.560
32	何かしたくて我慢できないようなことがある	.730	.224	.583
9	じっとしていなければならない状況において、落ち着かない感じがする	.661	.140	.457
17	あれこれと興味が移り変わることがある	.641	.186	.445
6	私はよく動き回るので、周りの人たちは落ち着かない気分になってしまう	.641	.397	.568
14	一番になりたがったり、先にやりたがることがある	.639	.228	.461
36	文章を読んでいても、人の話を聞いていても興味がないとついふらふら別のことを考えてしまう	.622	.207	.430
33	思ったことをなんでも口にしてしまうので、時には後で「しまった」と思うこともある	.618	.247	.443
18	他の人がしていること（話や活動など）をさえぎったり、邪魔したりする	.616	-.034	.381
4	質問が終わらないうちに、出し抜けて答えてしまうことがある	.610	.284	.453
3	直接話し掛けられた時に、聞いていないように見られることがある	.559	-.128	.329
12	他の同性の人と比べると、エネルギーがあふれている方だ	.541	-.169	.321
13	手足をそわそわ動かししたり、椅子の上でもじもじしたりすることがある	.490	.285	.322
29	深く考えないでぱっと決断することがある	.487	.365	.371
27	急に思いついて買い物する	.456	.263	.277
22	秘密を守れないことがある	.423	.032	.180
16	静かに読書することが難しい	.409	.134	.185
35	指示や命令を取り違えることがある	.407	.256	.231
30	講義や集会、勉強中など座っていることを要求される場面で席を離れることがある	.384	.296	.235
34	どなってしまって、話し合うことで解決できないことがある	.360	.180	.162
5	指示に従わず、またやるべき勉強や仕事を最後までやりとげられないことがある	.100	.706	.509
20	日々の活動を忘れてしまうことがある	-.007	.666	.443
28	勉強や仕事を途中で投げ出すことがある	.092	.657	.440
2	勉強や仕事、遊びなどで集中をし続けることが難しい	.156	.642	.437
25	物をどこに置いたか忘れてしまったり、どこに置いていたか分からなくなってしまうことがある	.025	.630	.398
10	気が散りやすい	.264	.575	.400
8	課題や活動に必要なものをなくすことがある	.089	.560	.321
31	勉強や仕事などを順序だてて行うことが難しい	.096	.519	.279
19	精神的な努力を続けなければ勉強や仕事を最後までやりとげることができない	.197	.476	.265
26	勉強や仕事で細かいところまで注意を払わなかったり、不注意な間違いをする	.426	.439	.375
	因子寄与率	6.711	4.550	11.261
	累積寄与率	22.370	37.537	

(3)孤独感尺度：諸井ら(1991)によって改訂された UCLA 孤独感尺度翻訳版20項目を使用し、それぞれ4件法（1点：けっして感じない～4点：たびたび感じる）で評定してもらった。

(4)フェイスシート：学年、年齢、性別について記入してもらった。

## VI、本調査結果

### 1、尺度の信頼性について

#### (1)ADHD 傾向尺度

ADHD 傾向とは多動-衝動性傾向・不注意傾向の度合いを測定する尺度であり、「まったくあてはまらない」から「非常にあてはまる」をそれぞれ1から5点として、得点が高くなれば ADHD 傾向が高くなるように採点した。さらに、下位尺度においては「多動-衝動性傾向」の20項目、「不注意傾向」の10項目別に合計点および平

均点を算出した。また、 $\alpha$ 係数と算出したところ、多動-衝動性傾向は $\alpha=.90$ 、不注意傾向は $\alpha=.86$ であったため、全30項目全てを分析に用いた。

### (2)対人恐怖心性尺度の検討

堀井・小川(1997)が作成した対人恐怖心性尺度は対人恐怖の度合いを測定する尺度であり、「全然あてはまらない」から「非常にあてはまる」を1点から7点として、得点が高くなれば対人恐怖心性が高くなるように採点した。さらに、下位因子6因子ごとに、合計点および平均点を算出した。また、 $\alpha$ 係数を算出したところ、『自分や他人が気になる』悩みは $\alpha=.85$ 、『集団に溶け込めない』悩みは $\alpha=.92$ 、『社会的場面に当惑する』悩みは $\alpha=.90$ 、『目が気になる』悩みは $\alpha=.91$ 、『自分が統制できない』悩みは $\alpha=.81$ 、『生きること疲れれる』悩みは $\alpha=.82$ であり、本研究では全30項目を分析に用いた。

### (3)改訂版 UCLA 孤独感尺度翻訳版の検討

諸井ら(1991)によって改訂された孤独感尺度は孤独感の度合いを測定する尺度であり、「けっして感じない」から「たびたび感じる」を1点から4点として、得点が高くなれば孤独感も高くなるよう採点し、合計点、および平均点を算出した。また $\alpha$ 係数を算出したところ、 $\alpha=.90$ であり全20項目を分析に用いた。

なおすべての分析はSPSS10.0を用いて行った。

## 2、ADHD傾向得点と対人恐怖心性得点、孤独感得点の相関

ADHD傾向得点と対人恐怖心性得点、孤独感得点の相関と各尺度得点の平均値・標準偏差を求めた(Table 2)。ADHD傾向と対人恐怖心性との間に弱い正の相関が認められた( $r=.305$ ,  $p<.01$ )。また、孤独感尺度との間には相関は認められなかった。

次に、ADHD傾向を多動-衝動性傾向と不注意傾向とにわけ、対人恐怖心性と孤独感との相関を求めた(Table 3)。多動-衝動性傾向と対人恐怖心性との間( $r=.226$ ,  $p<.01$ )、不注意と対人恐怖心性との間に弱い正の相関が認められた( $r=.396$ ,  $p<.01$ )。孤独感尺度との間には多動-衝動性傾向・不注意傾向ともに相関は認められなかった。

## 3、ADHD傾向(多動-衝動性傾向・不注意傾向)と対人恐怖心性、孤独感との関連性

### (1)ADHD傾向と対人恐怖心性、および孤独感との関連性

ADHD傾向の平均値66.93( $SD=19.23$ )を区切りに、ADHD傾向が低い群(以下、低群:30~65)と、ADHD傾向が高い群(以下、高群:66~150)にわけ、t検定を行った(Table 4)。対人恐怖心性得点において高群( $M=119.84$   $SD=36.6$ )と低群( $M=100.3$   $SD=33.63$ )との間に有意な差が認められた( $t(208)=4.03$   $p<.001$ )。以上より、ADHD傾向の高い人は対人恐怖心性が高いことが示された。ADHD傾向と孤独感については有意

Table 2

	対人恐怖心性	孤独感
ADHD傾向 M=66.93 SD=19.23	0.305**	0.036

\*\* $p<.01$

Table 3

	対人恐怖心性	孤独感
多動-衝動 M=44.22 (SD=13.27)	.226**	0
不注意 M=22.71 (SD=7.24)	.396**	0.095

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$

な差が認められなかった。

次に多動-衝動性傾向に関する20項目の平均44.22( $SD=13.27$ )を区切りに低群(20~43)、高群(44~100)に分類し、分析を行なった。また、同様に不注意傾向に関する10項目においても平均22.71( $SD=7.24$ )を区切りとして低群(10~21)、高群(22~50)に分類し、多動-衝動性・不注意別にt検定を行った。

その結果、多動-衝動性傾向の対人恐怖心性において高群( $M=114.36$   $SD=34.01$ )と低群( $M=104.75$   $SD=37.63$ )の間に有意な差が認められた( $t(208)=1.93$   $p<.05$ )。孤独感においては有意な差が認められなかった(Table 5)。

以上のことより、多動-衝動性傾向が高い人は対人恐怖心性も高くなるということが示された。

不注意傾向も同様に、対人恐怖心性において高群( $M=118.42$   $SD=36.19$ )と低群( $M=100.38$   $SD=34.23$ )との間に有意な差が認められた( $t(208)=3.71$   $p<.001$ )。しかし、孤独感においては有意な差は認められなかった。以上の結果より、不注意傾向が高い人は、対人恐怖心性も高いということが示された(Table 6)。

### (2)多動-衝動性傾向・不注意と対人恐怖心性および孤独感との分散分析結果

多動-衝動性傾向に関する20項目の平均44.22( $SD=$

Table 4

	ADHD傾向 高群 得点(SD)	ADHD傾向 低群 得点(SD)	t値 検定結果
対人恐怖 心性得点	119.84 (36.6)	100.3 (33.63)	4.03***
孤独感得 点	37.18 (9.40)	36.94 (10.05)	.18 n.s

\*\*\* $p<.001$

Table 5

	多動-衝動性 高群 得点 (SD)	多動-衝動性 低群 得点 (SD)	t 値 検定結果
対人恐怖 心性得点	114.36 (34.01)	104.3 (37.63)	1.934*
孤独感得 点	36.53 ( 9.44)	37.48 (10.01)	.708 n.s

\*p&lt;.05

Table 6

	不注意 高群 得点 (SD)	不注意 低群 得点 (SD)	t 値 検定結果
対人恐怖 心性得点	118.42 (36.19)	100.38 (34.23)	3.71***
孤独感得 点	37.25 ( 9.58)	36.58 ( 9.58)	.30 n.s

\*\*\*p&lt;.001

13.27) を区切りに低群 (20~43)、高群 (44~100) に分類した。また、同様に不注意傾向に関する10項目においても平均22.71 (SD=7.24) を区切りとして低群 (10~21)、高群 (22~50) に分類し、多動-衝動性・不注

意の2要因2水準の分散分析を行なった。

多動-衝動傾向においては、「自分や他人が気になる」悩みにもみ高群 (M=4.65 SD=1.31) と低群 (M=3.76 SD=1.37) との間に有意な差がみられた (F(1,206)=7.03 p<.01) (Table 7)。

以上より、多動-衝動性傾向が高い人は低い人よりも「自分や他人が気になる」悩みが高いことが示された。

不注意傾向においては対人恐怖心性の6因子すべてとの間に有意な差が認められた (Table 8)。

詳しくは「自分や他人が気になる」において、高群 (M=4.66 SD=1.29) と低群 (M=3.70 SD=1.37) との間 (F(1,206)=12.44 p<.001)、「集団に溶け込めない」において、高群 (M=4.05 SD=1.61) と低群 (M=3.31 SD=1.59) との間 (F(1,206)=9.29 p<.01)、「社会的場面に困惑する」において高群 (M=4.27 SD=1.55) と低群 (M=3.63 SD=1.60) との間 (F(1,206)=11.09 p<.001)、「目が気になる」において高群 (M=3.84 SD=1.59) と低群 (M=2.91 SD=1.53) との間 (F(1,206)=16.93 p<.001)、「自分を統制できない」において高群 (M=4.06 SD=1.25) と低群 (M=2.93 SD=1.07) との間 (F(1,206)=34.86 p<.001)、「生きることに疲れている」において高群 (M=3.55 SD=1.28) と低群 (M=2.88 SD=1.30) との間 (F(1,206)=10.01 p<.01)

Table 7

	多動-衝動性 高群 得点平均 (SD)	多動-衝動性 低群 得点平均 (SD)	F 値 検定結果
自分や他人が気になる	4.65 (1.31)	3.76 (1.37)	7.03**
集団に溶け込めない	3.85 (1.59)	3.52 (1.62)	0.01
社会的場面に困惑する	3.98 (1.65)	3.90 (1.57)	1.57
目が気になる	3.56 (1.72)	3.19 (1.53)	0.21
自分を統制できない	3.83 (1.39)	3.18 (1.12)	0.66
生きることに疲れている	3.43 (1.39)	3.02 (1.25)	0.31
孤独感	1.86 (0.50)	1.84 (0.47)	0.03

\*\*p&lt;.01

Table 8

	不注意傾向 高群 得点平均 (SD)	不注意傾向 低群 得点平均 (SD)	F 値 検定結果
自分や他人が気になる	4.66 (1.29)	3.70 (1.37)	12.44***
集団に溶け込めない	4.05 (1.61)	3.31 (1.59)	9.29**
社会的場面に困惑する	4.27 (1.55)	3.63 (1.60)	11.09***
目が気になる	3.84 (1.59)	2.91 (1.53)	16.93***
自分を統制できない	4.06 (1.25)	2.93 (1.07)	34.86***
生きることに疲れている	3.55 (1.28)	2.88 (1.30)	10.01**
孤独感	1.88 (0.48)	1.82 (0.49)	0.68

\*\*p&lt;.01 \*\*\*p&lt;.001

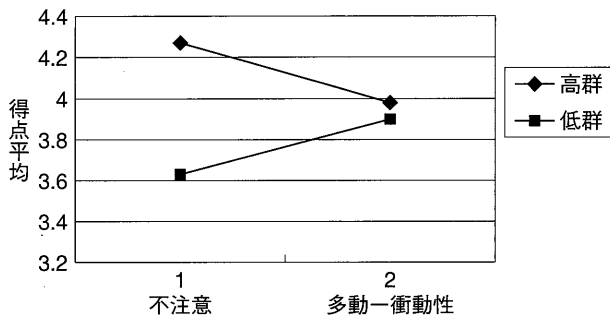


Fig. 1 社会的場面に困惑する

にそれぞれ有意な差が認められた。

以上の結果より、悩みとして不注意傾向が高くなると「自分や他人が気になる」、「集団に溶け込めない」、「社会的場面に困惑する」、「目が気になる」、「自分を統制できない」、「生きることに疲れる」がそれぞれ高くなることが示された。

孤独感については多動-衝動性傾向・不注意傾向ともに関連性が認められなかった。

次に多動-衝動性傾向・不注意傾向の交互作用を見たところ、「社会的場面に困惑する」悩みにおいて傾向が見られた ( $F(1,206)=2.54$   $p<.10$ , Fig 1)。以上より、「社会的場面で困惑する」悩みにおいて、不注意傾向の高い人と低い人の差が多動-衝動性傾向の高い人と低い人の差よりも大きい傾向が見られた。

## Ⅶ、考察

### (1) ADHD 傾向と対人恐怖心性との関連性

今回の研究では ADHD 傾向を不注意傾向・多動-衝動性傾向の2つの下位因子にわけ、対人恐怖心性、および孤独感について検討した。

まずは ADHD 傾向を ADHD 傾向が低群と高群にわけ、対人恐怖心性のあり方について検討した。その結果 ADHD 傾向が高い人は低い人に比べ、対人恐怖心性が高いことが認められた。このことは ADHD 傾向の人々は不注意や多動-衝動性などの行動特徴から、対人面において、失敗することが多く、そのために対人恐怖心性を抱いてしまっていると考えられる。これは岩崎(2006)や Kathleen Nadeau ら (2003) の見解とも一致する。以上のことから、ADHD 傾向の人々は対人恐怖心性を持ちやすいと考えられる。

次に ADHD 傾向を不注意傾向・多動-衝動性傾向に分類し、対人恐怖心性を6因子に分類して検討した。

まず、不注意傾向が高群と低群にわけ、対人恐怖心性のあり方について検討した。その結果、不注意傾向が高い人は、低い人に比べ、対人恐怖心性が高く、『自分や他人が気になる』、『集団に溶け込めない』、『社会的場面に困惑する』、『目が気になる』、『自分を統制できない』、『生きることに疲れている』の6因子すべてにおいて高

いという結果が得られた。

不注意傾向の項目を見ていくと、日常の中で物事を忘れやすい傾向や一つのものに集中できない傾向などを問う項目構成になっている。そのため、不注意な失敗を繰り返しているうちに、また何か失敗して他者に迷惑をかけてるのではないかと不安を抱きやすいと考えられ、「自分が人にどう見られているのかクヨクヨ考えてしまう」、「自分が相手の人にイヤな感じを与えているように思ってしまう」等の『自分や他人が気になる』悩みが高くなるのではないだろうか。

また、不注意傾向の人々は「集団の中に溶け込めない」、「グループ付き合いが苦手である」等の『集団に溶け込めない』悩みが高い。これは遠矢 (2002) の対人関係上の問題を強く認識しているという指摘とも一致していると考えられる。彼らは不注意傾向があるために、気の散りやすさや集団の中で人の声が聞きとりにくさや話についていけないさ、集団への馴染めなさがあると考えられる。

さらに『社会的場面で困惑する』では「会議などの発言が困難である」、「人前に出るとオドオドしてしまう」等の項目があげられている。このような悩みが高い理由として、不注意傾向から、失敗を繰り返すのではないかと不安が生じ、自分の行動に責任を持つことを要求される社会的場面等においてより一層不安が高まるからではないかと考えられる。

「根気がなく、何事も長続きしない」、「一つのことに集中できない」、等の『自分を統制できない』悩みが高い理由としては、不注意傾向のため、集中の持続困難より、途中で投げ出したり、忘れやすいためだと考えられる。

さらに『生きることに疲れている』においては、「生きることに価値を見出せない」、「充実して生きている感じがしない」等の項目があげられている。このような悩みが高まるのは失敗を繰り返してきたため、失敗を他者から指摘をされたり、自分で出来なさを実感したりし、自尊心が低下してしまっていることが原因ではないだろうか。Mark Selikowitz (1995) も自尊心の低下についての問題について指摘している。

多動-衝動性傾向に関しても同様に高群と低群にわけ、対人恐怖心性のあり方について検討した。その結果、多動-衝動性傾向が高い人は、低い人に比べ、対人恐怖心性が高かった。さらに、多動-衝動性が高い人は、低い人に比べ『自分や他人が気になる』悩みが高いことが示された。多動-衝動性の項目を見てみると、不適切な場面での落ち着けなさや行動化の早さを尋ねる項目となっている。このような多動-衝動性傾向から、周囲の状況をよめずに行動化してしまうため「後でしまったと思う」ことが多いと考えられる。そのため、「他人が自分をどのように思っているのかとても不安になる」、「自分が人にどう見られているのかクヨクヨ考えてしまう」、「自分が相手の人にイヤな感じを与えているように思っ

てしまう」等の『自分や他人が気になる』が高くなるのではないだろうか。

また、不注意傾向と多動-衝動性傾向について交互作用を見たところ、「社会的場面で困惑する」悩みにおいて、多動-衝動性傾向の高群と低群の差よりも、不注意傾向の高群と低群の方が差が見られた。遠矢 (2002) は不注意を認識するものは一見、ぼんやりとしたり、注意散漫に見えるが、実は日常生活において強い不安にさらされている可能性があり、さらに、対人面においても、不安を抱くことが多いと述べている。以上のことから、大勢の前で話すなどの『社会的場面において困惑する』悩みを抱きやすいと考えられる。そのため、多動-衝動性傾向が高い人よりも不注意傾向が高い人の方が『社会的場面において困惑する』悩みを抱きやすいと考えられる。

## (2) ADHD 傾向と孤独感との関連性

本研究においては、ADHD 傾向と孤独感との関連性は認められなかった。しかし、先行研究において ADHD 児は孤独感を感じやすいと述べられている (野口ら 2005)。先行研究と本研究との違いは、調査対象者が一見社会的生活を送っている青年期である点である。彼らは自分の行動を自覚した上で行動しているため、社会的に適応するためにも、自ら孤独感を感じないように何らかの工夫をしているのではないだろうか。また、彼らは成長するにつれて、個々で孤独感を解消するすべを社会経験を通じて、学んでいる可能性がある。しかしながら、今回の研究においては ADHD 傾向と孤独感との関連性について明らかにすることは出来なかった。そのため、今後、孤独感に関してさらに検討していくことが必要である。

## (3) まとめ

今回の研究において、多動-衝動性が高い人よりも不注意傾向が高い人の方が対人恐怖心性を抱きやすいという結果が得られた。

不注意傾向は「日々の活動を忘れてしまう」、「勉強や仕事で細かいところまで注意を払わなかったり、不注意な間違いをする」、「物をどこに置いたか忘れてしまったり、どこに置いていたかわからなくなってしまう」など、日常生活での物事を忘れやすい傾向や一つのものに集中できない傾向などを尋ねる項目構成になっており、これらの行動は失敗経験に繋がりがやすいものだと考えられる。そのため、多動-衝動性傾向に比べ、不注意傾向の方が失敗経験を繰り返すことが多いため、対人恐怖心性を抱きやすいと考えられる。さらに、失敗経験を繰り返すことで自尊心の低下も招きやすいように思う。以上から、本研究において多動-衝動性傾向の高い人よりも不注意傾向が高い人の方が対人恐怖心性につながると考えられる。

多動-衝動性傾向において、『自分や他人が気になる』以外で有意な差が見られなかった。多動-衝動性傾向

は「じっとしてられない、何かに駆り立てられるように活動する」、「何かしたくて我慢できないことがある」、「急に思いついて買い物をする」など、動き過ぎてしまったり、すぐに行動化してしまう傾向を測定する尺度構成となっている。遠矢 (2002) は多動性を認識するものは短期集中的に問題解決を図ろうとする傾向、衝動性を認識するものは問題に対して直感的に対処する傾向があり、多動-衝動性傾向の人々は物事をすばやく捉えることができ、問題を解決できると考えられると述べている。さらに、Alison Munden (2000) は ADHD 児は常に用心深く、互換の情報を同時に収集、統合することができ、視覚ですばやく物事を判断できると述べている。これらより、多動-衝動性傾向が高い人は、対人面においても場の雰囲気や相手の気持ちを感じ取り、直感的に問題解決するなど、良い面として働くことがあるのではないだろうか。これらの点については今後検討していく必要がある。

佐々木 (2005) は女性の場合には、社会的に問題となる行動上の逸脱が少ないので、問題が顕在化しないと述べている。また、高山 (2006) は女性には不注意優勢型が多く、多動傾向が少ないため、学童期に目立たず、発見が遅れ、摂食障害、不登校など二次障害が顕著になってから関係機関につながるケースが多いと述べている。さらに本研究から不注意傾向の女性のほうが多動-衝動性傾向よりも対人恐怖心性を抱きやすいという結果が得られた。そのため、行動が顕在化しにくい不注意優勢型への心理的サポートは重要なものであると思われる。

本研究では、不注意傾向の人々の方が多動-衝動性傾向の人々よりも対人恐怖心性を感じやすいという結果が得られた。しかし、本研究は質問紙調査によって検討したものであり、何故、不注意傾向の人々が対人恐怖心性を抱きやすくなるのかについては実証することができなかった。そのため、ADHD 傾向のある人々への心理的サポートのあり方について明らかにしていくために、今後は不注意傾向・多動-衝動性傾向の人々に対して、対人恐怖の抱き方の違いについてさらに検討していくことが必要である。

孤独感に関しては、本研究においては ADHD 傾向の人々は対人恐怖心性は抱いているにも関わらず、孤独感との関連性は見られなかった。そのため、今後、孤独感に関してさらに検討していくことが必要である。

## 付記

本研究は福岡女学院大学大学院での修士論文に加筆・修正を加えたものである。本研究をすすめるにあたり終始ご指導いただきました福岡女学院大学大学院人文科学研究科大野博之教授に深く感謝いたします。また、調査にご協力いただきました皆様に心より感謝いたします。

## 引用参考文献

- 1 Alison Munden・Jon Arcelus (著) 市川宏伸・佐藤泰三 (監修) 紅葉誠一 (訳) 2000 ADHD 注意欠陥・多動性障害親と専門家のためのガイドブック 東京書籍
- 2 相川充・佐藤成二・佐藤容子・高山巖 1993 孤独感の高い大学生の対人行動に関する研究—孤独感と社会的スキルとの関係— 社会心理学研究 No. 8 44-55
- 3 C.Keith Conners, Ph.D・Juliet L. Jett, Ph.D (著)・佐々木和義 (訳) 2004 Attention Deficit Hyperactivity Disorder (in Adult and Children) The Latest Assessment and Treatment Strategies 金子書房
- 4 David B. Sudderth・Joseph Kandel (著) 田中康夫 (監修) 海輪由香子 (訳) 2001 大人の ADHD—社会でじょうずに生きていくために VOICE
- 5 堀井俊章・小川捷之 1996 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学年報 Vol.20 55-65
- 6 堀井俊章・小川捷之 1997 対人恐怖心性尺度の作成(続報) 上智大学年報 Vol.21 43-51
- 7 堀井俊章・卯月研次・小川捷之 青年期の対人不安意識に関する研究 1995 Vol.13 215-221
- 8 堀井俊章・小川捷之 青年期における対人不安意識の発達的变化 心理臨床学研究 1997 Vol.14 448-455
- 9 石橋朝世 2002 大人の ADHD 現代のエスプリ No.414 76-83
- 10 岩坂英巳 2006 おとなの ADHD とは そだちの科学 6 号
- 11 Kathleen Nadeau Ph.D/Patrica Quinn M.D 2003 AD/HD & BODY 女性の AD/HD のすべて 花風社
- 12 中根晃編 2001 ADHD 臨床ハンドブック 金剛出版
- 13 安藤清志・子安増生ら 1999 心理学辞典 有斐閣
- 14 岡野高明 2002 成人女性の注意欠陥/多動性障害 現代のエスプリ No.414 84-92
- 15 P.H ウェンダー 2002 成人期の ADHD 病理と治療 新曜社
- 16 Sam Goldstein・Michael Goldstein 2005 ADHD の理解と対応 どうしてうちの子は落ち着きがないの? 明石書店
- 17 曹陽・高木修 大学生における孤独感がコミュニケーション手段選択に及ぼす影響 日本社会心理学第44回大会論文集 364-365
- 18 清水健司 2001 青年期における対人恐怖心性と孤独感との関連 心理臨床学研究 Vol.19 525-534
- 19 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 2005 青年期における対人恐怖心性と第2の分離固体化の関連について 心理臨床学研究 Vol.23 579-590
- 20 佐々木和義 2005 LD・ADHD・自閉症・アスペルガー症候群「気がかりな子」の理解と援助 金子書房 16-20
- 21 高山恵子 2006 ADHDをいきるということ そだちの科学 No. 6 87-91
- 22 田中康裕・穂刈千恵・福田周・小川捷之 1994 青年期における対人不安意識の特性と構造の時代的推移 心理臨床学研究 Vol.12 121-131
- 23 遠矢浩一 2002 不注意、多動性、衝動性傾向を認識する青年の心理・社会的不適応感 心理臨床学研究 Vol.20 372-383
- 24 渡部京太・齊藤万比古 2003 注意欠陥多動性障害 (AD/HD) の青年期・成人期 精神科 3-3